

## 第26回研究会参加記

### — 留萌管内の公社牧場を訪ねて —

松岡 栄

(帯広畜産大学)

昭和54年度の現地研究会は、8月23日と24日の両日、留萌管内の初山別、羽幌、苫前で行われた。これまでの十数回におよぶ現地研究会で北海道のおもな酪農地帯はほとんどまわっているが、まだ視察していない所ということで、当地が選ばれたとのことである。私はまだこの地に行ったことがないので、歌の文句ではないけれど、「知らない町を歩いてみたい」という気持も手伝って、喜んで参加させてもらった次第である。

23日は、午後5時までに、小平町の自然休養センターに全員集合した。ここで、総会、懇親会が行われた。総会はいたってスムーズに終了し、懇親会となった。本会には、業者、普及員、試験場の研究者、農協職員、大学の教官、酪農家などいろいろな人が会員となっているので、懇親会は実に楽しいものである。出不精で、人付合のあまり良くない私にとっても、このような場で、いろいろな人と親睦を深めることができることは、研究会での最大の楽しみであります。会場となった自然休養センターが海水浴場のすぐ近くに位置していたこともあったのであろう、アルコールもまわり、宴もたけなわになったところに、水泳大会(?)が行われ、無事に泳ぎついたところで、楽しい宴もお開きとなった。

翌日の24日は、晴天にめぐまれ、その上風もなく、見学には絶好の日和となった。8時30分に宿舎を出発し、現地に向う。今回は、農業公社牧場を視察するのが主な目的である。最初に初山別村有明地区に行き、瞭陽農場を見学、次に、羽幌町高台地区に行き、越智牧場と安井(靖)牧場を見学した。最後に、公社牧場とは関係はないが、苫前町の上平共同利用模範牧場を見学した。昼食後、滝川にむかい、滝川の駅前で、散会し、2日間の日程も無事終了した。

### < 瞭 陽 農 場 >

ここは、昭和47年から5戸の農家が全面協業経営をとり、昭和51年に農事組合法人をつくり、北海道農業公社牧場設置事業により、規模拡大と施設の近代化をはかった農場である。協業経営に入った当時は、経産牛72頭、育成牛44頭を飼育する規模であったが、事業の計画では、成牛160頭、育成牛60頭(成換196頭)の規模にまで拡大された。

この農場は、昭和36年に、乳牛2頭と原野12.7haからはじまったとのこと。これまでの規模にするまでの苦労がしのばれるとともに、「酪農家魂」といおうか、この遅いバイタリティには頭の下る思いがした。

現在、常時搾乳する頭数は80頭前後とのことで、昨年の1頭あたり平均乳量は6,200kgと良い成績を上げている。現在の労働力は、男6人、女3人で、搾乳牛の頭数の割にはかなり多く、余裕があるようだ。それは、牛の手入れがよくゆきとどいていること。牛舎の外内がよく清掃されていることなどからもうかがえた。

現在、ホルト犢の育成・肥育を計画し、その施設を建設中であった。これは、労働力に余裕があるからできることであり、余り乳に端を発し、近い将来に「生産調整」が問題となるであろうから、これに対処する意味もあるとのことであった。

経営の収支についてみると、53年に若干のマイナスがあったが、ほかの年は、大きくプラスとなっており、いたって健全経営の感がした。

この農場では、労働力、経営にしても余裕が感じられた。これは協業経営からくる大きな利点であろう。「協業経営の利点はよくわかるが、その運営がむずかしい」という話をよく聞く。この農場は、うまく運営されている良い例だと思われる。この運営での苦労話とか、うまく運営することなどについて、もう少し話を聞きたかったが、時間がなく、次の目的地に向った。



瞭陽農場にて

### < 羽幌高台公社牧場 >

この地区は、昭和51年から52年にかけて、農業公社牧場設置事業により規模拡大と施設の近代化をはかったところであり、5戸の農家が参加している。この地区の経営規模は天北地帯に比べて零細であったのを、一戸平均乳用牛63頭、所得750万円を目標に事業が計画されたそうである。この地区では、水田転作地の草地造成が可能であったこと、離農跡地、未利用地の確保が容易であったことなどにより、事業は比較的スムーズに行われたとのことであった。

この事業には5戸の農家が参加しているが、ほとんどの農家が年間400～500万円の休耕保償金をもらっているとのこと。うらやましいやら、また奇妙な制度があるものと感心するやら、複雑な気持であった。

今回は、5戸のうち、越智牧場と安井牧場を見学した。

越智牧場の事業の計画数は、成牛50頭、育成牛24頭（成換60頭）、安井牧場は、成牛40頭、育成牛

21頭（成換49頭）の規模である。両牧場とも、事業完了時の乳生産量は、51年実績に比べ240%台という大巾な増加を示した。年間1頭あたり平均乳量は、越智牧場で約5,900kg、安井牧場で約5,500kgとのことで、とびぬけて多いものではないから、乳生産量の大巾な増加は、もっぱら頭数の増加によるものであるようだ。

主人は、事業により経営も安定してきたが、余り乳の問題で、将来に大きな不安があると訴えておられた。

### < 苫前町上平共同利用模範牧場 >

この牧場は、昭和49年度に、北海道での7番目の共同利用模範牧場として完成したものである。用地としては、草地200ha、放牧地120ha、採草放牧兼用地80haの総面積300haを擁しており、飼養頭数は計画では550頭となっているが、420頭くらいが限度とのことであった。

ここは、生後6ヶ月から分娩2ヶ月前まで預託を行うシステムであるが、この牧場に隣接して、幼年哺育センターがあり、ここで、生後8日から6ヶ月までの哺育・育成が行われていた。このセンターの子牛収容能力は120頭である。

用地内には沢が多く、土地の起伏がはげしくて、採草作業がなかなか思うようにならないこと。西の浜風が強く、その対策として、防風柵などをたてているが、まだ万全でないこと。冬には雪が多く、運動不足になりがちであること。屋根から落ちる雪で出入口がふさがるので、急きょ木造の通路を建て増したこと。当初は、冬期間、牛舎の湿気が高くなり、また気温も下り、病気が多発したが、暖房と除湿をかねてボイラーを焚くようになってから病気が少なくなったこと。その燃料費が馬鹿にならないこと。などなど、いろいろ苦労話を聞かせてもらった。

見学に行ったときは、雨不足のため、草地のあちこちに枯草が目立ち、あたかも晩秋の草地をみている錯覚にかられる有様で、この地方の立地・気象条件の厳しさをみせつけられたような気がした。

以上、今回は主に公社牧場を視察した。見学した牧場はいずれも昭和51年から52年に事業が実施されたところである。このときの融資額は、農家1戸あたり2,000～2,500万円に達している。事業の完了により乳生産量が大巾に増加し、やっと希望の光が見えはじめ、さてこれからというときに、余り乳の問題が突然とびだし、近い将来に、必ず生産調整をおしつけられる。なんと惨い仕打である。ここでも、確りとした農政の重要さを今更ながら痛感した次第である。

余談になるが、見学を終えて昼食をとり、バスで滝川にむかうまでに1時間くらい暇ができた。このときに、鯉番屋・花田家番屋を見学する機会を得た。この建物は日本最北端の重要文化財だそうである。この宣伝文句は「北海道開拓の歴史を秘め、ニシン漁場の姿を今に伝える」であったが、まさにそのとおりで、いたく感銘した。私にとっては、今回の研究会での一つのよい思い出になりそうである。